

# こい 鯉をかざり かぶと 兜をかざり

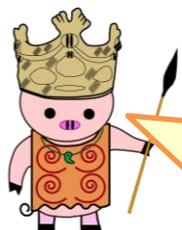
だいよんわ  
第四話

- 鯉のぼりは、中国の古い言い伝えから生まれた。
- もともとは、武士の風習だったものが広まった。
- 後継ぎが生まれたことを周囲に知らせる意味もあった。
- 兜や鎧は、わざわざから身を守ってくれるように。

「端午の節供」の由来には2つあること。

菖蒲と蓬が、千年以上も昔から「端午の節供」とともに大切にされてきたこと。

これまでの第壹話から第参話で、そのことが分かりました。それでは、鯉のぼりや兜をかざるのは、なぜなのでしょう？



あんぶう

鯉って、日本庭園の池にいるイメージよね。何か関係あるのかな。

兜や鎧は、男の子のあこがれだったのではないかな？



いものん

中国の古い言い伝えに、次のような話があります。

黄河という大きな川の上流には、竜門と呼ばれる激流がつらなる場所がある。そのふもとに集まっている、たくさんの鯉たちには、そこを登ることはできないとされていました。そして、もしも登ることができたなら、その鯉は竜になれる、と言われていました。

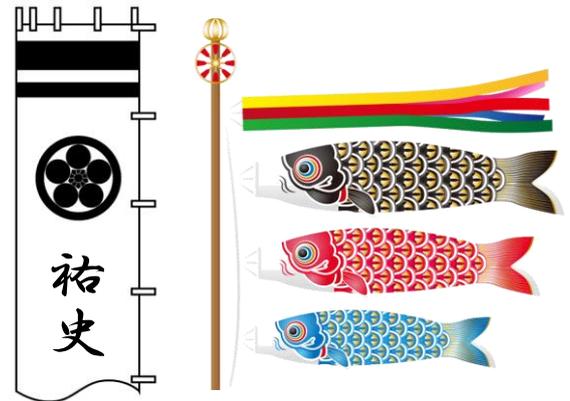
今でも、「登竜門＝出世や成功のための関門や、その関門を通ること」という言葉がありますが、この言い伝えがもとになっているそうです。

『後漢書』今から1600年くらい前の中国で書かれた書物。その中の「李膺伝(りようでん)」に書かれています。

その言い伝えがもとになって、鯉のぼりには、竜になった鯉のように、男の子が立派に成長をしてほしい、という願いがこめられています。

日本では、室町時代(今から600年～450年ほど昔)に、武士の家では男の子が生まれると、5月5日の「端午の節供」に吹き流しをかざりました。

やがて江戸時代(今から400年～150年ほど昔)になると、5月5日は式日と定められ、大名や旗本たちは式服で江戸城に参り、将軍にお祝いを伝えるようになりました。将軍に後継ぎとなる男の子が生まれると、家紋の入った旗やのぼりを上げる風習がありました。これは、天の神様に来てもらうための目印であることと、「我が家に後継ぎである男の子が生まれました」とおひろめする意味もあったそうです。



この風習は、武士の間でも広まっていきました。一方、庶民は男の子が生まれると、紙に縁起のよい鯉をえがいたのぼりをかざりました。

それが江戸時代の中ごろになると、町人も武士の旗やのぼりのように、鯉のぼりをかざるようになったそうです。

(参考)『国史大辞典』、『日本風俗史事典』、「全日本人形専門店チェーン」HP



兜をかざることも、もとは武士の風習でした。武士の家に男の子が生まれると、さまざまな悪いことから身を守ってくれるようにとの願いをこめて、身を守る兜や鎧、五月人形をかざるようになりました。また、

本人の代わりに悪いことを肩代わりしてくれる意味もあるそうです。

さて、「端午の節供」と言えば、和菓子！柏餅と粽ですね。

次がいよいよ最終話。この和菓子について、くわしく調べてみましょう！

第伍話につづく…

(次回予告) 東は柏餅、西は粽。どちらを食べる？ 第伍話「和菓子の選択を」